

特集  
島根  
～神々の国の「田舎」づくり～

Special Features  
Shimane  
Constructing "pastoral districts" in the kingdom of the gods

守る(今を支え育てる)  
Defend (Support and develop the present)

## 伝統の石見神楽を伝える

三原 董充

MIHARA Tadamitsu

益田市石見神楽神和会/会長



### 1—石見神楽久々茂保存会の発足

東京オリンピックのあった昭和39年、松江市でスポーツ、演芸、郷土芸能の祭典「島根県青年大会」が開かれました。益田市の代表として、豊川青年団久々茂支部が「石見神楽」を披露することになりました。しかし、神楽の衣装、面、道具類は一切ありません。そこで、当時益田市内にあった3団体の神楽社中(邦楽などの同門の仲間)で、最も歴史の古い久城社中より衣装などを借りて出演したのです。

後でこの借り物を返しに行った時に、社中のメンバーから「それほど舞(この地方では神楽のことを舞と言います)が好きなら、古い衣装で良かったら一通り舞えるだけの物を揃えてやるから一旗あげたらどうか。協力するから考えてみんか」と言われました。青年団だけでは

出来ないことから、地元で代々神楽の指導をしておられた方や経験者の人達と相談し、この年の9月に14名の会員で「久々茂神楽社中」を発足させました。

その後会員も少しずつ増え、昭和45年の大阪万博への出演を機に、現在の名称である「石見神楽久々茂保存会」としました。専用の練習場や倉庫を整備しつつ会員も25名となり、今年で45周年を迎えることができました。

昭和43年には、後継者育成の必要性と子供達の要請もあったことから、子供5人の「久々茂子供神楽クラブ」を結成しました。子供の人数の増減はあったものの10年位続けました。しかし、中高校生ともなると部活や塾により全員一緒に練習が出来ず、舞は地元の祭りや年一回程度しかできませんでした。会員数も増えるどころか減る一方で、やむなく子供神楽を解散しました。



■写真1—「大蛇」の一場面。石見神楽の代表的な演目である。大蛇のふん装と舞い方は神楽の中で最も難しいと言われている。須佐之男命が老夫婦と愛娘の稲田姫を救うため、八岐の大蛇と勇壮な戦いを展開する。(益田市役所「石見神楽」パンフレットより)

### 2—久々茂子供神楽クラブの再結成

それから5、6年経った昭和59年の12月の中頃、当時小学校5年の長女から「学校の男の子が『これをお父さんに渡して』と言ってたよ」と、一通の手紙を受け取りました。そこには5年生2名と4年生4名の連名で、「みんな舞が好きで舞ってみたいので教えてください。ぜひお願いします」と書かれてありました。しかしその頃、私は子供との係わりを持つことに気が向かなかったのです。

それは1年前の昭和58年、島根県西部地区を襲った豪雨による未曾有の大水害の復旧工事のさなかで起こった交通事故で、下校中だった当時小学校2年生の次女の舞子を失ったことにあります。工事現場に向かう途中の大型ミキサー車に巻き込まれての即死でした。事故現場は水害で道幅の1/3が崩れ、その復旧工事のため非常に道幅が狭くなっていたにも関わらず、通行人の安全対策が何も執られていませんでした。

当時PTAの役員をしていたことから、役員会や臨時総会を開いては「非常に危険なので、なんとか安全に子供達が通学出来る様にしてほしい」と何度もお願いしました。子供達からも「大きい車がスピードを出すと怖い」という声が出る様を見て、教育委員会や学校が何と言おうが、子供達を守るために「3学期からバス通学をさせよう」と保護者会で申し合わせをした矢先の出来事でした。何とも辛く悲しく、はがゆい思いをし、1年経ったとは言え、まだまだ心の整理がつかず「我が娘の命を守ることが出来なかったのに、人様の子供の面倒をみることなど出来るのだろうか」と思い悩んでいた時でした。

昭和60年1月のある朝、バスを待っていた子供達が私を見つけ「おじさん。僕ら一の手紙読んだ？みんな舞が好きじゃけー、舞いたいけー、教えてください」といたずら盛りの男の子達が揃って頭を下げて頼むのです。そう言えば舞子も神楽が好きで、神楽衣装を干したりしていると「舞子も神楽が好きじゃけー、手伝う」と言ってよく手伝いをしてくれたことを思い出しました。そして、舞子のためにも頑張るってこの子供達に出来るだけのことをしてやろうと決心したのです。

「舞子も、子供達が舞えるようにきっと天国で応援してくれるだろう。舞えるようになったら喜んでくれるだろう」との思いで、3月から稽古をすることにしました。6人のメンバーに加えて同級生や後輩達も入会し、子供達だけで舞える演目も増えました。その子供達も中学生となり、体も大きくなり「大蛇」まで舞える様になったのです。



■写真2—平成19年9月の敬老会で「頼政」を披露した、現在の久々茂子供神楽クラブのメンバー

### 3—中学校での神楽クラブの結成と指導

長女が中学を卒業し、PTAの役員の荷が降りてほっとしていた頃、突然中学校の先生から電話がありました。「中学校で石見神楽クラブを作り、その指導者を地区の人をお願いして地元の人との交流を計りたい。神楽だけではなく昔の遊びや様々な事を教えて頂き、生徒達にこの地方に伝わる文化を知ってもらいたいの指導をお願いしたい」とのことでした。さらに「三原さんに神楽を習っている生徒たちが『学校に神楽クラブを作ってほしい』と校長先生にお願いに行ったようで、三原さんの了解があればクラブを立ち上げてやる事が出来るのですが…」と言うのです。そう言われては断ることも出来ず、学校で生徒に教えると言うことはもちろん初めてのことで、不安で悩んだりもしましたが、久々茂保存会のメンバー3名の協力を得て、中学校での神楽クラブの発足となりました。

しかし「中学校へ神楽を教えに行く」と友人に話すと、「大丈夫か？今、あの中学校の生徒達は荒れていて大変らしいぞ」と意外な反応が返って来ました。平成元年6月、神楽クラブには18名が入部したということで、顔合わせに学校へ行きました。すると、授業時間なのに教室に入らずうろろしている子がいるし、教室内では生徒の行儀も良くなく、先生との会話も友達同士の様で現代的と言うか、今風と言うか、良くも悪くもこの雰囲気にならなければと思いました。

文化祭で神楽を発表することになり、演目は『大蛇退治』に決まりました。クラブの全員を舞台上に立たせるには、まず大蛇8名、須佐之男命1名、須佐之男命の使い1名、翁2名、姫2名、難しい大太鼓と笛は大人が手伝い、小太鼓2名、手拍子金が2名で18名になります。希望する役が重複している時は「おじさんが適性を見て決めるの



で、そのことについて了解してほしい。どの役でも欠けたら舞にはならないから18人全員で1つの物を作りあげよう。最後まで全員で頑張るから」と言って始めました。

ところが、2学期に入ってから生徒たちも中だるみと言うか、本性を表したと言うか、こちらの話はあまり聞かなくなったり、外にいた子から何か合図されて教室から出ていってしまったり、蛇胴じょうどうを着けて練習し始めたかと思いきや5分も経たない内に脱ぎ捨てて雑談をしていたり。それでも先生は注意もしない。そんな状況が何度かあった

ので、ついに大声で怒鳴ったこともありましたが、11月の文化祭が近づく頃になると、生徒達の目の色が変わって来て練習にも熱が入り、何とか手応えを感じる様になりました。わからない所や出来ない所があれば積極的にどんどん聞き、技術も上達し、行儀も随分良くなって来ました。

そして迎えた文化祭。衣装を着せると、いつも賑やかな腕白どもがあまり喋らなくなり、顔をこわばらせて不安そうにしています。そこで皆を集め「ええか、自信を持って!あわてずに落ち着いてやること。ある程度の緊張感を持ってやることは必要じゃけど、過度の緊張は体が動かんからねのお、リラックスしてやれよ」と言って舞台へ送り出しました。生徒18人の舞はとても素晴らしい出来で、満員の観客から大きな拍手をもらい、楽屋へ引き上げた生徒たちの満足感一杯の無邪気な笑顔を見た時、やってみて本当に良かったと思いました。その後、神楽の発表は毎年行われ、この学校の文化祭の目玉となっています。

#### 4——「須佐之男命」役の子

神楽クラブ発足3年目となる平成3年、16名の入部があり演目も過去2回と同様『大蛇退治』に決まりましたが、須佐之男命を希望する生徒がいませんでした。「おじさんが指名するがええか」と了解を得て、自己紹介の時、恥ずかしそうに小さな声で話をし、何をやりたいか迷っている様子だった生徒に「須佐之男をやってみんなか」と聞きました。すると「はい、やってみます」と引き受けてくれました。



■写真3—中学校の文化祭で発表する神楽クラブ

後で先生が「あの生徒はとても内気で大人しい子なんですが大丈夫でしょうか」と心配しているので、「大丈夫。芸事は内気とか恥ずかしがりとかは関係ないですよ。私自身子供の頃は周りも認める恥ずかしがり屋で、人前に出ることがとても苦手だったんですよ。なぜか私に似たところがあるあの子も、自分からアピールすることが出来る様におもおて。こっちから目立つ役を与えて、出来るか出来ないかはこれからの頑張りです。それが生きた教育だと私は思うんです。たとえ失敗しても何かをつかんでくれると思いますよ。まだ始まったばかりですけれど心配しないで下さい」と答えました。それから、その生徒は人一倍稽古に励み、見事にやり遂げてくれました。

後年、神社の秋祭りに久々茂保存会として神楽奉納に行った時、高校生になったその生徒がわざわざ楽屋まで来て「中学校では大変お世話になりました。本当に良い思い出になりました。ありがとうございます」と挨拶してくれました。それがとても嬉しく、今でも良く覚えています。

#### 5——子供達との交流

クラブ結成から4、5年経つと女子生徒も入部する様になりました。平成10年頃、女子6名男子9名が入部した年には、テキパキと皆をまとめるのが上手な女子生徒が中心となり、男子生徒が完全に女の子に引っ張られて、真面目に稽古に取り組んでいました。そのためか文化祭での舞は、息の合った良い出来映えでした。

いつもだと文化祭が終わると「それでは皆さんご苦労さんでした。良かったよ。さようなら」と話して別れます。

その後は、たまに町で出会った時に挨拶するくらいです。しかしこの年は違いました。12月の中旬頃、職場に1本の電話があり、あの世話好きで皆を良くまとめてくれた娘が「実は神楽クラブの忘年会をしたいので先生も参加してください。それから会場に久々茂の神楽の練習場を使わせて下さい。あそこならカラオケもあるし広いし丁度いいと思うので・・・」と言うのです。「会場は使ってもええけど、おじさんは行かん方がええじゃろお。おまえらあだけでした方が楽しかろお?」と言うと「それは駄目です!皆と決めたんです。是非先生とやりたいんです」と言うので「このことを家の人と学校の先生に報告すること、それならやってもええよ」と言うと、電話口の向こうで「やったあー」と大きな歓声が上がり、次々に電話を代わり「〇〇役をやった△△です。有難うございます」「□□役の▽▽です。今度会うのが楽しみです」などと大騒ぎでした。

冬休みに入ると早々に忘年会が開かれ、飲み物や菓子を持ち寄り、「先生はこれ!」と言って日本酒の1升ビンを持って来てくれました。神楽の思い出話やゲーム、カラオケなどをして大変楽しい時間を子供達と一緒に過ごさせてもらい、思い出深い出来事でした。



■写真4—約20年前の小中学生の時の地元文化祭での舞。現在は久々茂保存会で活躍中

#### 6——地域とのつながり

この中学校区内の神社の祭りへ神楽の奉納に行くと、生徒の保護者の方が楽屋に来られて「文化祭では孫娘が大変お世話になりました。◇◇役をやった娘の祖父です」と言って御花(祝儀)をくださいました。また、町で出会っても「××役をやった娘の母です。本当に良かったです。感動しました」と、色々な方から感謝の声を掛けられることが多くなりました。多くの人に喜んでもらえる石見神楽は「本当に素晴らしいなあ」と改めて思うのであります。

#### 7——子供達のこれから

今から5年前、神楽クラブ担任の先生から礼状が届きました。そこには「先日の文化祭では、神楽クラブのステージ発表も無事終わることができました。練習からずっとあたたかいご指導をいただいたおかげと感謝しております。当日の発表を見て、教職員も大変誉めておりました。日頃なかなか見せないようなやる気や表情を見せてくれる生徒もおり、私も神楽と言うものの魅力の大きさに感激したしいです。文化祭の後、生徒たちに感想文を書かせました。私は、かなりの生徒が文章を書くことが好きではないので、文を書かせることに不安を持っていたのですが、全く文句など言わず、みな一生懸命書いておりました。言葉が乏しいため生徒の思いが伝わりにくいと思いますが読んでやってください」と書いてあり、生徒達の手紙が添えてありました。その幾つかを抜粋で紹介します。

「神楽クラブになぜ入ったかはナゾだけど、今自信を持って『入って良かった』といえます。みんなの前でやった時は恥ずかしい気持ちでいっぱいでしたが、終わった後は満足感でいっぱいでした」

「女の子でも絶対に楽しめる神楽でした」

「とっても煩わしい私を、よくあそこまで教えてくださいました。うちの母にどうだった?と聞くと、『感動して涙が出てきた』と言ってました。私もとってもいい経験をしたと思っています。ありがとうございます」

その他にも沢山の嬉しい言葉がまだまだ書かれてありました。

好きで仲間と始めた石見神楽ですが、神楽が持つ魅力が取り持つ縁で係わり合い、その中で成長してくれた彼らが大変嬉しく誇りに思います。大人になった子供達が、やがてはその子や孫たちへ石見神楽を教え、これからも世代を越えた人々の交流で生きがいのある生活が続いて行くと思っています。